



いきいきサタデー 山の手倶楽部 永富 進氏

空をかついで ■「地域」と子ども

桂坂の教育

空をかついで

「地域」と子ども

肩は
首の付け根から
なだらかにのびて。
肩は
地平線のように
つながって。
人はみんな
空をかついで
きのうからきょうへと。
子どもよ
おまえのその肩に
おとなたちは
きょうからあしたを移しかえる。
この重たさを
この輝きと暗やみを
あまりにもちいさいその肩に。
少しずつ
少しずつ。

石垣りん「空をかついで」(『略歴』より)

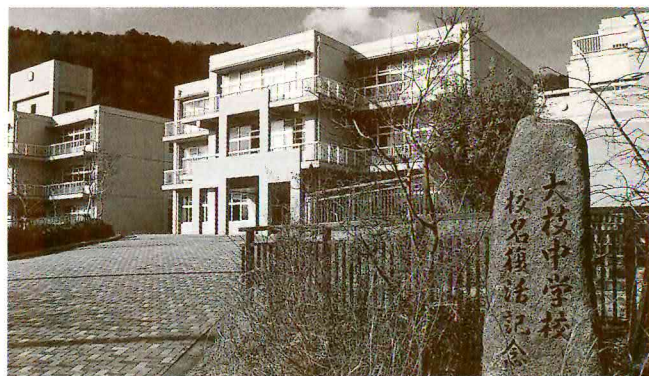


福祉施設「ふれあいの里」内にある西養護学校(別掲)が桂坂の北西部に位置するのを除けば、桂坂保育所・児童館(愛称「かざらっこ」)・桂坂小学校(別掲)・大枝中学校は、いずれも桂坂の中央部北に在ります。

南前方に広がる京都市街地のパノラマを高台の利点を活かし借景として校地内に取り込んだような、この3つの教育施設は、まことに眺望絶佳。加えて近くには、自然を学習するには好都合の野鳥公園や古墳公園があり、また、学術研究施設「国際日本文化研究センター」(「日文研」)が隣接しているのですから、これほどよい教育条件に恵まれているところはありません。

大枝中学校

1989年(平成元)年4月に桂坂小学校と同時に開校式を迎えた大枝中学は、「正しく、遅しく、美しい心」の生徒を育成することを目標に掲げており、桂坂・大枝両学区の生徒が学んでいます。



大枝中学校

写真は、大枝中学校と校門を入った右側に建つ「大枝中学校校名復活記念」の石碑です。

1946(昭和21)年、教育制度が大きく転換して中学が義務教育化され、新制中学制度に切り替えられると、当時の乙訓郡大枝村でも新制中学を設立する気運が昂まり、保護者だけではなく、村民全体による「教育後援会」が結成されて、会費で中学を支えることになりました。この、村を挙げての熱い思いが、1947(昭和22)年5月5日に「大枝村立大枝中学校」として実を結んだのです。しかしわずかに3年間、存在しただけで大枝村の京都市編入とともに上桂中学校に併合され、廃校となってしまいます。

今の大枝中学校の校名を付けるに際しては、地域で公募され、その約8割が「大枝中学校」を望んだものでした。校名復活の記念碑は、大枝・大原野に在住の、旧大枝中学校同窓生によって建てられたものです。

開校当初から、「花を育て、心を育てる大枝中学校」、「共に学び、共に生きる」を合い言葉に、勤労体験学習や西養護学校との交流学習にとり組み、花や野菜の植えつけから手入れ、収穫に至るまでを、生徒と教職員が心を一つに汗を流して実践し、「正しく、遅しく、美しい心」の生徒を育成するという、高邁な建学の精神の実現に向かって学習と諸活動が行われています。

「かざらっこ」

1999（平成11）年4月に開設された保育所と児童館は、「地域の子育て」を支援する「ステーション」として桂坂での活動を開始しました。



桂坂保育所

保育所は「両親の就労や疾病等のため、保育に欠ける状態にある小学校就学前の児童を保育する施設」で、社会福祉法人の京都社会福祉協会が運営します。産休明けから小学校就学前の児童で、定員は90名。

「あるがままで受け止め、子どもたちが元気でいきいき過ごせる場にしたい」というのが保育所長井園長の方針。

申込案内の問い合わせ先は、洛西支所福祉部（福祉事務所）支援1係（332-8111代）です。

桂坂児童館

児童館は、「学童クラブ」が小学校1年生から3年生までの児童が対象で、登録制。定員は65名。授業の終わり児童館にやって来た時には「お帰りなさい」で迎えられ「ただいま」で応える、家庭的で心の和む雰囲気があります。

「幼児クラブ」は2才児からが対象で、火曜と金曜クラスの、それぞれ定員30名。この幼児クラブは、幼児と母親が親子で参加し、一緒に遊びながら親子の絆を深めていくことをねらいとしています。また、木曜日に開かれる「幼児のひろば」は、0歳から18歳までの児童であれば自由に参加することができます。

児童館の開館時間は10時から17時まで。入口で名前・住所・電話番号・学年を書いて入り、図書室・児童館遊戯室を利用できます。



子育てと「地域」

いづれも「地域の子育て」を支援する「ステーション」つまり「地域」に開かれた施設を目指しており、「子育て相談」や「子育て講座」が開かれたり、屋上のプールが乳幼児に開放されたり、色々な催しが企画されています。

逆に「地域」から幼子たちに直接語りかける楽しい試みも、例えば桂坂消防分団によって1999年7月28日に行われています。「予防活動」の1つとして女性団員が手づくりの人形劇を作り、保育所の子どもたちに「花火遊び」をする時の注意をやさしく呼びかけています。

地域の中で

育成のこころみ

この（2000年の）3月に卒業する小学校6年生が、10年先の「20周年記念」を迎える年には「成年式」という1つの通過儀礼を過ぎて22歳。立派な社会人として活躍を期待される年齢です。この児童たちが将来、豊かで清新な心、深い思慮、そして広い視野をもち、社会で存分に活躍できる力を培っていけるように、学校と「地域」とは手を携えて、大所高所からとりくんでいくことが大切でしょう。

大人の子ども像

1999年5月29日、保育所・児童館の建設にあたって開催された「プレ・ワークショップ」の中で、今の子どもに望む大人の願いや望ましい教育環境として、次のような点が挙げられていました。

- 自分で考えて行動できる子ども
- 相手の気持ちを思いやれる子ども
- 地域で異なる年令の子どもの交流
- 子ども同士の集団の中で互いに成長しうる環境

ところが「今の子どもについて、どのようにとらえているか」との質問になると、子どもにかなりきびしい眼が注がれているようです。

- 小学生も元気がなく心も身体もひ弱になっている
- 遊びや面白いことにとびつかない
- 遊び方、遊ぶ場所を知らない

- 多人数で遊べない
- 子ども同士の関係をつくるのが下手のようだ
- 異年齢集団では遊ばない
- 勉強や習いごとが忙しくて時間がなく、友達と遊ぶのにアポイントをとるのが大変のようだ

これがワークショップに参加した人たちの眼に映った現実の子ども像です。

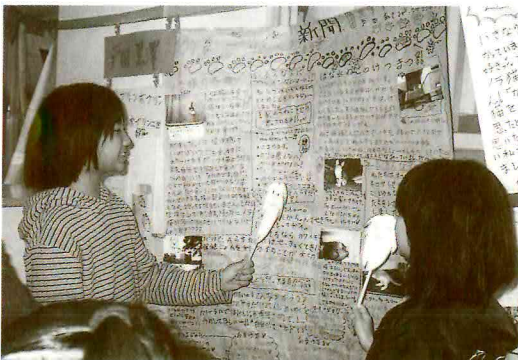
ところでこの桂坂では今、この地域、つまり学術研究施設や福祉施設のある「地域性」を活かして、「自分で考えて行動できる」、そして「相手の気持ちを思いやれる」子どもを育てていこうという、学校や「地域」の多様なこころみが見られます。

小学校・中学校と福祉施設の交流

桂坂小学校と大枝中学校では、学校創立以来、隣接する福祉施設との交流が盛んです。

地域学習発表会

1999年11月12日、桂坂小学校では創立10周年を記念して「地域学習発表会」が行われました。「子どもたちが見つけた桂坂の自然・歴史・街の様子」が、創意工夫を凝らした、さまざまな形式で発表されたのですが、3年生の「この街大好き、桂坂自慢」の中では当然のように西養護学校が対象の一つになり、また、4年生は桂坂の福祉について調べ、「手と心で読む」のテーマで「人にやさしい桂坂」をとらえていました。例年行われている学芸会は今回はこの「地域学習発表会」に変更されましたが、いつもは西養護学校の人を招き、交流を深めています。



地域学習発表会

大枝中学校と福祉施設

大枝中学校においても、いま武道場の建つ敷地はかつては学校菜園として活用され、西養護学校の生徒とともにさつまいもの苗を植え、収穫し、その味に舌鼓を打つ、そんな和やかな心の交換風景が見られました。

現在はまた新たな形で交流が進められています。

伊藤香織さんが西養護学校との2回目の「交流活動」について次のように感想を記しています。

私は小学校からずっと、障害をもっている人も、もっていない人も同じ人間だと学習してきた。

小学校に〈やまゆり学級〉という障害をもった子がいくクラスができた。別にその子たちと遊んでも何も思わなかった。楽しかった。もっと遊びたいと思ったこともあった。

1回目の交流の時も少し不安感ももっていたけれどけっこう楽しかった。でも今回の交流は少しこわかった。じっとしてられない子がいるから。私がすわっている時に、前でウロウロしたり、踊ったりする子が、はっきりいってこわかった。

一重の円になって踊るとき、私は養護学校の子に扶まれた。すごくドキドキした。でも、踊っているうちに〈こわい〉というものがなくなって、スッキリした。その時にあらためて〈同じ人間〉ということがわかった気がした。

私はこう思いました。頭ばかりで理解するんじゃなくてその人たちとふれあう方が本当に、学習してきたことの意味がわかるし、大切なことだと思った。

他にも生徒会が開校以来つづいている西養護学校の餅つき大会に参加して一緒に杵を振りおろしたり、ボランティアグループが特別養護老人ホームを訪問して入所の老人を慰めたりしています。

日文研の「授業」

桂坂では、国の学術研究機関が隣接するという「地」の利を活かしたこころみが、自分たちのとは「異なる」世界のあることを「学び」の途上にある生徒たちに教えます。

桂坂小学校と大枝中学校では、近寄りがたい学術研究の籬を越えて生徒たちに新鮮な「感動」を与える工夫を年間行事の中に採り入れています。国際日本文化研究センター（「日文研」）の協力を得て行われるのですから、他地域の学校からすれば羨ましいかぎりでしょう。

大枝中学校は4月に新入生を迎えると、この「日文研」の施設見学を実施し、生徒は自分たちの中学と隣り合わせに国際的な学術研究機関があり、意外に開放的な施設内で比較文化の様々な研究が進められていることを知り、また「日文研」の先生を中学校に招聘して学術講演会が催され、学問の世界の香りを聞くことになります。

また、桂坂小学校では1996年より「日文研」の先生を直接迎えて「平素とはまったく異なる〈授業〉」が行われています。（詳細は「小学校」篇「日文研」でも「小学生の授業ができないようでは、日文研の教授は務まらない」など「ジョークが所内で聞かれる」ようになり、「研究者と小学生の切磋琢磨」の中でこの「おたがいの交流」はその後も継続されています。（河合隼雄・梅原猛編著『小学生に授業』の「はじめに——日本の教育に、新しい風を」より）

「地域」の中で

キャンプ・スポーツを通して

子どもたちが健全に育つことを願い、非行防止の活動を進めたり、あるいはスポーツで汗を流す場を設けたりして「地域」の子どもたちを異なる年齢集団の中で生活・活動させ、交際範囲を広める手助けをしようという団体——少年補導委員会や体育振興会などもあります。

桂坂少年補導委員会

桂坂少年補導委員会は、1991（平成3）年2月に「桂坂支部」として発足しました。

活動の目的はもちろん少年の非行防止と地域に根ざした少年の健全な育成活動を推進することにあります。

桂坂は新興の住宅地。子どもの数は増え、近所の子ですら顔は分かりづらくなっていますから、できるだけ多く子どもたちと接する機会を作らなければなりません。

恒例となった夏の教育キャンプをはじめ、小学校のプール開放、桂坂クエストⅢ、子どもイロイロスポーツ大会、親と子のふれあいデーなどイベントが計画され、「多くの子どもたちと関わりがもて」て、しかも「なるべく親子で参加できる」ように配慮されています。（『桂坂』54号1998.7.7・前田富造桂坂支部長「10年度行事予定」）



キャンプファイアー

夏の教育キャンプは、小学4年から中学3年までの子どもが参加できる催しで、「いつもの学年中心の生活では得がたい経験もでき、この催しに参加した諸君には楽しい思い出となって残るようです」。（『桂坂』64号・「サマーキャンプ・少補ニュース」）また、親委員とともにボランティアで参加する高校生や大学生の学生班が若さにものをいわせて子どもの世界に飛びこみます。異なった年齢間、いわばタテ社会の中での共同生活は、一面の厳しさはあるものの、得がたい体験でしょう。

親と子のふれあい

少年の「健全育成」のためには「親と子のふれあい」も重視されます。かつて親子で「グライダー作り」の催しがありました。

年々参加者も増え、今年は約250名の方が長さ約40センチのグライダー作りに挑戦。自分の子どもの頃を懐かしみながら、グライダーを作るお父さんを熱心に子どもさんが見ているというシーンもあり、会場は終始和やかな雰囲気にもまれていました。豚汁で一息ついた後、体育館の中で学年別に飛行大会が行われました。

自分たちが作ったグライダーが体育館の中に元気よく飛ぶと、盛んな歓声がわきおこっていました。

『桂坂』8号・1994.2.14.「第4回・親と子のふれあい教室」



キャンプ風景

「子どもは親の後姿を見て育つ」といい、「子どもは父母の行為を映す鏡である」ともいいます。家庭・地域における私たち大人・親の一言半句、一挙一動は子どもたちの視聴の中にあり、青少年の「健全育成」を左右しかねません。ほれほれするような「後姿」を見せたいものです。

少年補導委員会は夏休み期間中、防犯推進委員、各自治会役員、小・中学校PTAの地域委員の協力を得て各自治会ブロック単位で「夜間パトロール」を実施し、また、桂川では桂地区単位で、小学校PTAとともに「水禍防止パトロール」を行っています。

「地域」の中で

昔の遊び

山の手倶楽部女性部

山の手倶楽部の女性部の人たちは毎年、秋の「いきいきサタデー」の1日、小学校を訪れ、子どもたちと「昔の遊び」で互いに楽しい交流の時を過ごします。また、3学期には「1年生と遊ぼう」や「3年生と遊ぼう」の日を授業のある普通の日に設けて、やはり「昔の遊び」を子どもたちに伝えます。

かつて子どもたちには、身近にいる大人や上級生たちから、街中に伝承されている様々なしきたりや作法に伝統行

事、そして楽しい遊びのあれこれも一緒に教えられる機会と場所がふんだんにありました。「他人」の存在を否定なしに意識せざるをえないし、また、異質な価値観とも出会う中で鍛えられていた当時は、地域の、いわば「教育力」が好ましい形で機能していたといえます。

京の地藏盆

京の街の風物詩、それも昔の「地藏盆」を喜多みどりさんのことばでしのでみましょう。

私の育った西陣では格子の家が建ち並び、道幅は狭く、町内5、60軒の中は家族的そのもの、お地藏様はどこ町内にも1つあってお花・お水・線香が欠かさず供えられ、よだれ掛けもいつも新しいのに掛け替えられている。うなぎの寝床といわれるように、先ずお店の部分があり、内玄関に中の間と続くが、店の広間に祭壇を作り、お地藏様をお迎えし、子どもの遊び場所として2日間、解放して頂くのである。

朝は早くからお地藏さんの飾り付け道具が出され、お当番のお家の格子が外されていくのを子どもたちが総出で見守る。そのお家の前にテントを張り、ぐるりに親が子どもの安全、幸せを願って奉納した名前入りの提燈をはりめぐらせる。飾り付けの時、自分の名前の提燈を見付けては大歓声をあげる。

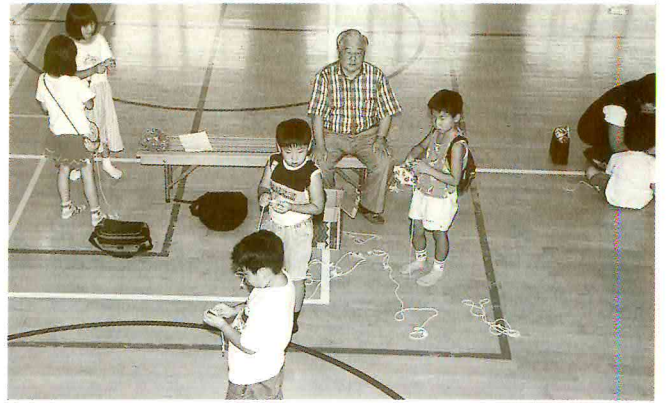
22、23両日の日程が張り出されるので、おやつの時間、余興の時間、お数珠廻しの時間等しっかり見届ける。そのうち町内中の子どもが、赤ちゃんから女学生、中学生まで全員集まってくる。余程の用事がないかぎり家に帰る子はいない。ゲームをしたり、緩とりをしたり、何かしらで退屈することはない。お姉ちゃんが本を読んでくれる、お兄ちゃんがいたずらをしてくれる、それだけで楽しい。お茶はあるし、おやつは貰える、甘茶もいつも沸いているという具合である。ただ、今のように豪華なお菓子でなく、お団子だったり、さつま芋であったりしたこともあったけれども、問題でない。

夜は早々に食事を済ませ、湯上がりに浴衣を着せてもらい、お兄ちゃんからさく怪談に「キャーキャーワー」と怖がったり、笑いころげたり。2日間は、そんな子どもに付合っているのか、自分たちも楽しんでいるのか、大人たちがゆったりと一日中いてくれる。写真を撮ってくれたり、お茶をくれたり、ラムネをくれたり。

2日目の昼には尼さんがお経を上げに来られて、皆で大数珠廻しをする。

今も西陣ではこのスタイルで地藏盆を迎えている町内が多い。ただ、昔は子どもたちが溢れ、のんびりと坐っている大人も多かったけれど、——ということが違ってきているようである。楽しいことを求める子どもたちの心は昔も今も変わらないだろうに。

(「地藏盆の思い出」・『桂坂』13号・1994.8.8より)



いきいきサタデー

ここにある「遊び」は、今の、テレビゲームが中心で、ディスプレイを眺め暮らす日常から見れば、まことに幼稚で、たわいのないものに映るかも知れません。しかしこのような場合は、『京都市基本構想』(1999.12)の所謂「心豊かで優れた社会性を身につけた子どもたちを育てるため」の大切な「教育環境」でした。

よりよい教育環境を求めて

昔と今とでは、住む人の「地域共同体」についてのとらえ方に少々差異が生じているかも知れません。しかし、たくましく、心も創造力も豊かな子どもに育ててほしいという願いは今も昔も変わらないでしょう。子どもの健全な育成には、例えばこうした街中に生きる好ましい伝統が、やはり次第送りの的に大人から子どもへ、また、子ども社会の中であれば年長から年少へとしっかり受け継がれていくような「教育環境」を、学校、家庭、「地域」が協力して整えていくことが大切でしょう。

2000年1月に「桂坂教育後援会」が発足し、会員を募って、地域で「児童の教育環境及び施設の充実並びに健全育成と健康増進に関する援助を行う」ことになりました。

これは、京都市が設置する「人づくり21世紀委員会」の提唱する「市民の手による人づくりの輪」、つまり「21世紀の京都を担うたくましく思いやりのある子どもたちの育成」・「子どもたち1人ひとりの多様な可能性が最大限開花できる教育の風土づくり」の提言に呼応するものです。

